

本の ひろば

[月刊] キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2015年1月1日発行（毎月一回発行）第684号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

二人のカタリナ 三好千春

本・批評と紹介

ロドニー・スターク 著／穂田信子 訳
キリスト教とローマ帝国 山崎ランサム和彦

W.H.ウィリモン 著／上田好春 訳
異質な言葉の世界
介入する神の言葉 小島誠志

F.W.グラーフ 編／片柳榮一 監訳
キリスト教の主要神学者 上 水垣 渉

佐々木勝彦 著
日本人の宗教意識とキリスト教
井ノ川 勝

柴崎 聰 著
詩集 火の言葉 川崎正明

ポール・リクール 著／久米 博、小野 文、小林玲子 訳
愛と正義 阿部善彦

鈴木崇巨 著
礼拝の祈り 高田和彦

マルティン・ルター 著／ルター研究所 訳
エンキリディオン 小教理問答 内海 望

久野 牧 著

イエス・キリストの系図の中の女性たち
関田寛雄

ジェイムズ・H.コーン 著／梶原 壽 訳
十字架とリンチの木 荒瀬牧彦

嶺重 淑、波部雄一郎 編
よくわかるクリスマス 八木谷涼子

アズィズ・S.アティーヤ 著／村山盛忠 訳
東方キリスト教の歴史 辻 明日香

近刊情報

書店案内

1 JANUARY
2015



ラディカル・ラブ クイア神学入門

パトリック・チェン著／工藤万里江訳

性的少数者の視点から再発見された、過激な愛としての神。本書はそれを伝統的な三一論の枠組の中で新しく描き直す。あらゆる分断を乗り越える過激な愛の福音は、既成の価値観にとつては本質的に「クイア」なのだ。

◆A5判・本体2300円



私の人生のテーマは「現場」

韓国教会の同時代史を生きて

呉在植著／山田貞夫訳

呉在植（オ・ジェシク）牧師の自伝。60年代の韓国教会青年たちの社会運動から21世紀のエキユメニカル運動まで、常に「現場」で歩み続けた信仰者の姿。

◆四六判・本体2500円



イエスという人の物語

ホセ・ロペス・ビヒル、マリア・ロペス・ビヒル著／祐川郁生訳

ラテンアメリカで話題を呼んだ、ラジオドラマに基づくイエス物語。144章、1千頁を超える圧倒的な迫力。各章末には聖書学的な注が付いて理解を助ける。イエスは我々同様、友人を持ち、泣いた、笑ったりする青年だった。そしてゆっくりと、神に愛される生き方、自分の召命を見出していったのだ。

◆A5判・本体5000円



カトリック札幌教区
勝谷太治司教推薦

フリードリヒ・ユストウス・ペーレルス

両宮栄一著 告白教会の顧問弁護士



35歳に満たぬ若さで処刑されたボン・ヘッファーの盟友の生涯を通して、従来あまり注目されてこなかった、ドイツ教会闘争における信徒の働きに光を当てた貴重な労作。

◆四六判・本体3100円

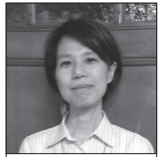
使徒行伝 中巻

荒井献著 現代新約注解全書

上巻から37年ぶりの刊行となる待望の続刊。中巻は使徒行伝6章1節から18章22節を扱う。邦人の手になる学界最高水準の行伝注解もいよいよ完結間近（下巻は2015年秋刊行予定）。

◆A5判・本体9000円





出会う・本・人

二人のカタリナ——三好 千春

私が修道者としての召命を信じて援助修道会へ入会したのは、三〇歳になったばかりの時だった。その後、二年の修練期を終えて初誓願を立て、上智大学神学部で学んだ。表面上は順調に修道者として歩んでいたが、内面では、私は自分に対する自信の無さと自己嫌悪の念に苦しみ悩んでいた。

そんな私が、アメリカに留学することとなった。シカゴに私が降り立ったのは、二〇〇一年の十二月。まだ九・一一の余韻が修道院の周りにも色濃く残っていた。

シカゴへは、日本語の書物として聖書以外にもう一冊、キャロル・L・フリンダースが書いた『奇蹟を見た七人の女性神秘家の肖像』を携えていった。この本の原題は *Enduring Grace: Living Portraits of Seven Women Mystics* で、プロテストメントのフリンダースが、七人のカトリック女性神秘家について書いた本だ。著者が一人ひとりの女性神秘家たちの霊性や内面に迫る視点や描き方が素晴らしく、当時繰り返し読んだ本だった。そしてシカゴにいる間、私を助けてくれた多くの人々の中に、この本に取り上げられたシエナとジェノヴァの二人の聖カタリナがいた。

十五歳で不幸な結婚をして苦しんだジェノヴァのカタリナは、

二五歳の時に回心の体験をする。その体験についてフリンダースは、「カタリナは、やっと彼女自身を産み出すところだった」と記した。シカゴで、いわば自分自身を産み出そうとしていた頃の私にとり、この言葉と、ジェノヴァのカタリナは大きな支えだった。それに対し、自分を産み出した後の方向を手助けしてくれたのが、シエナのカタリナだった。

自宅の隠修室で三年以上イエスと共に祈りの生活をしたカタリナは、ある日、イエスから部屋の外に出て人々の中に入り、彼ら愛することを通してキリストを愛するよう告げられる。同様に、シカゴでの私の霊的・心理的歩みも、自分の内面の問題解決の段階から、人々の中に入って、彼らと共に生きる段階に入っていた。それは祈りの中で、自分がジェノヴァのカタリナからシエナのカタリナに手渡されるというイメージで示された。

シカゴでの私の内的な旅を根底で支え導いて下さったのは、神でありイエス・キリストだ。が、二人のカタリナも伴走してくれたと思う。カトリックには「聖徒の交わり」という概念があるが、シカゴで私はそれを体験したと思っている。

(みよし・ちはる『援助修道会修道女、南山大学人文学部キリスト教学科教授

説得力のある再構成
ロドニー・スターク著
穂田信子訳

キリスト教とローマ帝国 小さなメシア運動が帝国に広がった理由



山崎ランサム和彦

「ローマ帝国のはずれて起こったよくわからない小さなメシア運動が、古典古代の多神教を駆逐し、西洋文明の支配的信仰となるまでにどう展開したか。疑問はたつたこれひとつだ」(一四頁)。このような問題提起で始まる本書は、初期キリスト教史の非常に説得力のある再構成となっている。原著の出版が一九九六年であるから、邦訳が出るまでに一八年かかったことになる。ともあれこの良書が日本語で読めるようになったことを喜びたい。

著者は一九三四年生まれ、現在バイラー大学の社会科学教授である。原著のタイトル『キリスト教の興隆——社会学者による歴史の再考 (The Rise of Christianity: A Sociologist Reconsiders History)』は、本書の内容をきわめて的確に要約している。つまりキリスト教がローマ帝国において興隆した理由を、社会科学の理論と分析方法を通して明らかにすることだ。

「キリスト教は爆発的な集団的改宗を通して成長した。」初期のキリスト教は社会の下層民の宗教だった。「ユダヤ人の大

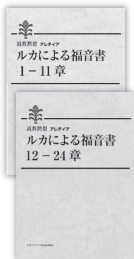
量改宗はごく早い時期に終息した。」宗教的行動、特に殉教のような行動は非合理的な選択の結果である。」著者が社会科学のツールを用い、時に具体的な統計分析や現代の宗教との比較などを用いながら、右に列挙したような通説を突き崩していく手際は実にあざやかで、読み手を引き込む力がある。ただしその背後には、人がある宗教に改宗する社会的なメカニズムは、時代や文化を超えた普遍的なパターンがある、という基本的な前提がある。この点について、「現代宗教に見られる社会的パターンのまま紀元一世紀のローマ世界に当てはめることができるのか？」というもつとも疑問が予想される。しかし著者の主張の可否は、他の研究方法からの成果とつき合わせつつ、個別の論点ごとに検証すべきであろう。

冒頭で引用した研究課題に対して、本書が提出する解答は、ある意味で非常にシンプルである。古代世界においてキリスト教が広く受け入れられた理由は、キリスト教には——そしてキリスト教徒の生き方には——「魅力」があったからである。例えば、疫病に感染した者は見捨てて逃げるのが常識とされた社

会にあつて、キリスト教徒が自分たちの仲間だけでなく非キリスト教徒をも献身的に看護する姿は周囲の異教徒に強い印象を与えた(第四章)。また、結婚が軽視され、中絶(しばしば妊婦を死に至らしめた)と女兒の間引きが横行する社会において、キリスト教会における女性の地位は当時としてはたいへん高いものであった(第五章)。また、民族的・文化的多様性の混沌の中で憎悪の渦巻く古代都市にあつて、キリスト教は愛と慈善の教えにより、安定した愛着のネットワークを創り出すことに成功した(第七章)。つまり、キリスト教は当時の社会や既存の宗教が解決できなかった問題に答を与え、混沌の中にあつた社会に再生への道筋を示したのである。これに多くの異教徒は惹きつけられた。その意味で、キリスト教の登場と拡大は時機を得たものだった(信仰者ならそれを「摂理」と呼ぶだろう)。キリスト教の興隆を純粹に社会学的見地から分析しようとする著者のアプローチを感じる読者もいるかもしれない。

けれども、著者は最終章において、キリスト教の特定の教義こそがその興隆の「究極的要素」だったと主張する(二六、五頁)。キリスト教の愛と慈善の教えは当時の異教世界になかった「人間性」を提供し、ローマ世界を再生に向かわせる文化を創りだしていったという。この重要な論点に著者はごくあつさりしか触れていないのが、評者にはやや物足りなかつた。巻末には二〇ページ以上に及ぶ詳細な文献表が付いている(ただし、原書が書かれた一九九六年以前の著作しか含まれていない)。牧師や神学者のみならず、古代史やキリスト教に関心を持つ一般の読者にも、広くお薦めしたい一書である。(やまざきらんさむ・かずひこ(リバイバル聖書神学校校長) (四六判・三〇六頁・本体三二〇〇円+税・新教出版社)

「ルカ」の連続講解が 待望の単行本化



説教黙想 アレテア 合本

ルカによる福音書

1—11章 / 12—24章

執筆者 加藤常昭 / 小副川幸孝 / 橋谷英徳 / 吉村和雄
高橋重幸 / 菅原裕治 / 古屋治雄 / 上田光正
平野克己 / 佐藤司郎 / 徳善義和 / 高橋誠
楠原博行 / 願念望 / 焼山満里子 / 北尾一郎

聖書黙想誌「説教黙想アレテア」73(83号)に連載された、
教派を超えた定評ある牧師・神父・神学者による説教黙想
の合本。ルカ福音書の説教準備に必携。《各B5判並製》

1—11章 460頁・6480円 / 12—24章 430頁・6048円

雑誌のご案内

説教黙想 アレテア No.87
(2014年12月11日発売)より

ローマの信徒への手紙
講解開始!

季刊 年4回発行(3.6.9.12月発売)

B5判 定価税込 1,903円

年間購読料(送料別) 7,612円

日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyout@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)

http://bp-uccj.jp

教会が語るべき根源的なメッセージ
W・H・ウイリモン著
上田好春訳

異質な言葉の世界
洗礼を受けた人にとつての説教
介入する神の言葉
洗礼を受けていない人への説教



小島誠志

二冊の本の表題を見ればわかるように、これは説教論です。訳者の属している「説教塾」の学びの中では是非訳出しようという事になったと訳者あとがきに記されています。

これらの本の書かれるようになった動機について著者W・H・ウイリモンは次のように言っています。

「あるとき、ウォルター・ブルツゲマン〔旧約学者〕が、わたしにこう言いました。『誰か特定の人たちに向けて話してくれないような説教には、飽き飽きしたよ。なかでも困るのは、洗礼を受けているわたしたちにはもう用がないといわんばかりの説教だね』(五頁)。

そこで著者は考えるのです。洗礼を受けた人にとつての説教とはどういう説教なのか。

そもそも説教というのは、「洗礼の準備、または洗礼後の解説としておこなわれてきた、礼拝のなかのひとつの行為だと理解するのが最善」(一六頁)ではないか、それがウイリモンの基本的な考え方です。それゆえに「洗礼」というコンテキストを忘れた説教は、福音をゆがめて知的な二者択一に解消させてし

ま(一七頁)というのです。

「説教のスタイルがどんなものであろうと、説教者は、ひとつの明確な『言語世界』のなかで語っているという『洗礼の真理』から逃避することはできません。わたしたちは、風変わりな語り方をする集団なのです」(二〇頁)。

そこから今日の教会の説教についての根本的な批判がなされます。「このことを保守派の文脈で言ってみるとこうなるでしょう。肝心の福音の言葉を放棄して、代わりに教義の主張の繰り返しと道徳主義、さらには、セルフ・ヘルプの心理学(自己救済心理学)や、ナルコティック・マントラ(自己催眠性の呪文)を手に入れました。もつとリベラルな発想で言ってみると、説教の言葉が、キリスト教の言語世界にある怒りをそつと回避して、都会的なセンスはあっても、既存の支配秩序を容認するだけの、あたりさわりのない発言になり果てています。……キリストとその十字架を説教することができず、かわりに人間性とその進歩を語ります」(二四頁)。

この観点から、アメリカのキリスト教界に大きな影響を与え

たH・リチャード・ニーバーへの批判が展開されます。教会とそこでなされる説教は時代の文化にコミットしその文化をつくり出すために存在しているのだろうか。世に対して「異質な言葉」であるゆえにこそ世に向かつて語られ、世を中から変える力が与えられているのではないか。

二冊目に「洗礼を受けていない人への説教」という副題がついているのが少し意外でした。わたしたちの常識では順序が逆ではないかと思つたのです。しかし二冊を読めば納得させられます。教会が教会として生き形成されるために語られるべき根源的なメッセージが先ず語られなければならないのです。洗礼を受けていない人——求道者のためのメッセージをいつも入り口に、入り口にとどまりつづけていてはならないのです。教会は自ら生かされて、遣わされるのです。

そして遣わされることによって教会は教会になっていきます。「福音宣教とは、教会に新しいメンバーを呼ぶことではなくて、福音宣教の賜物として教会が新しい教会になることです。……福音宣教は、神の介入そのものであり」(一〇頁)、「福音宣教をすることによって……教会は生まれかわることができません」(二二頁)。「他者に福音を告げることであつた受洗者は、いつまでも福音を受け続ける」(二三頁)のです。

福音宣教は単に他者に教へ他者を変える働きではないのです。福音宣教の働きに神が介入してくださるそのことによって教会自身が神に出会い生かされます。

福音は生来の人間を鼓舞し自信を与えるものではなく、まったくその反対に、持っていると思つている人間を打ち砕きます。「サウロは以前には自信満々でした。……その彼が、今はタマスコへの道で天からの光に撃たれ、盲目になりました。子どものように手を引かれて歩き、見知らぬ人に慈悲を乞うて癒され、以前は軽蔑していた人たちから教えを受けています」(一〇七頁)。

神の国にひき入れられる第二のチャンスはだれにでも与えられます。それは考えて探究して見出すなかではありません。救い主に出会って徹底的に打ち砕かれ「無力な泣きつづける幼児の姿に追いこ」まれるのです(一〇九頁)。

第五章「神は世を愛された」の論述はまことに興味深くかつ考えさせられました。宣教の始まりは神が(キリストが)世を愛されたことにあるのであって、弟子たちの志にあるのではない、というのです。そこから創世記38章の、舅によって子を産んだあのタマルの物語へと論が展開されます。これは必読。

原文はどうなっているか、などいっさい気にならないほど見事にこなれた訳文に脱帽です。

(おじま・せいし||日本基督教団久万教会牧師)

(異質な言葉の世界||四六判・二三三頁・本体二二〇〇円+税・日本キリスト教団出版局)

(介入する神の言葉||四六判・二八〇頁・本体二四〇〇円+税・日本キリスト教団出版局)

人物でたどる神学史二〇〇〇年

F・W・グラーフ編

片柳榮一監訳

キリスト教の主要神学者上

テルトゥリアヌスからカルヴァンまで



水垣 渉

A・E・マクグラスは『キリスト教の将来』（本多峰子訳、教文館刊、二〇〇二年）で、現代の西洋のキリスト教が学会（学究的神学）と教会（信者の実生活）との二つの世界に分離してしまっていることを痛烈に批判している。この現実を多かれ少なかれ経験しているであろう日本の読者が、本書の書名を目にし、手にとって頁をめくってみて、これがドイツの学問的神学の代表的研究者による神学の歴史を内容にしていると知ったら、読もうとか買おうとかいう意欲をはじめからそがれてしまいかもされない。しかし待つてほしい。これは実に魅力的な書物なのだから。

確かに本書は現代の最高水準の研究に立った過去の神学者の紹介である。二世紀から一七世紀初めまでの一六人の神学者の一人一人についてドイツの専門の研究者が、生涯、著作（神学）、影響の三面から最新の研究成果を簡潔に紹介している。本書によって、新しい知識が得られるだけでなく、キリスト教について新たに考え直すきっかけも与えられるかもしれない。主要神学者を手掛かりにして「彼らが我々に働きかける現在の

な力をひしひしと感じ受け止め、その力の源を自らのうちに見出し、我々なりに出立することが、我々のなすべきことであることをあらためて思う」と監訳者が「あとがき」で述べている通りである。その意味で本書は、現代の神学者が過去の神学者と格闘して発見した貴重な「力の源」を提示するものであって、これは、「教会」とは無関係の「学芸」の暇仕事ではない。

本書が取り上げる一六人の神学者のうち、五人は古代に属し、八人は中世に属する。残る三人が一六世紀に活躍した人々である。その中でプロテスタントの読者にとってあまり耳慣れない名前前は、一四世紀のギリシア教会の神学者グレゴリオス・パラマスと宗教改革後のカトリック神学者ロベルト・ベラルミーンの二人であろう。しかし彼らの靈性に基づいた神学が現代の私たちに語りかける力は大きい。

け、中世のみならず宗教改革の神学にも根本的な力の源になったことが本書の叙述から分かる。本書で取り上げられている主要神学者の特徴は、現代にいたるまでの影響力の大きさにある。編者グラーフ教授の人選の一つの基準になったのもその点であった。勿論影響はよい意味でも悪い意味でも言われる。本書はそのことを公平に叙述している。

本書が扱う時代は、学会と教会との分離や対立がまだなかった時代であり、古代では大学の神学部や神学校もなく、そもそも神学というような学問も成り立っていなかった時代であった。「神学者」は自分と教会の信仰をめぐって苦闘しなければならなかった時代であった。したがって、その時代の主要神学者は信者一般の代表者であったとみなしてよい面がある。とくに信仰と神学と靈性とが結びついていた点でそうである。本書を読んで得られる益はそこにもある。なお本書の奇妙というべき魅力は、原著からして副題が「テルトゥリアヌスからカルヴァン

まで」と題されているにもかかわらず、実際の叙述は、テルトゥリアヌスの前のマルキオンに始まり、カルヴァンのあとのベラルミーンで終わっているという、不一致にも感じられるかもしれない。その理由は、私にはわからない。しかしキリスト教神学の古典的代表者の最初をマルキオンに認めるのは大胆な試みであり、それが本書の目玉でもあろう。

（みずがき・わたる 京都大学名誉教授）
（A5判・三七四頁・本体三九〇〇円＋税・教文館）

神学ダイジェスト117号

急速な変化を遂げる現代社会。その中において、多様な価値観に直面するキリスト者。本誌は海外の神学動向を紹介しながら、現代人のかかえる信仰への真摯な問いに光をあてる。

2014年12月発行
A5判112頁
定価630円・送料82円

特集 教会における信徒

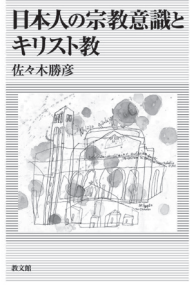
- 共同宣教司牧を通して「信徒」の概念
- 第二バチカン公会議と信徒の登場
- 使徒的勧告『信徒の召命と使命』
- 『信徒教会奉仕職の召命と公認』解説
- これからの信徒教会奉仕職
- 霊の賜物とキリストの体
- 新しい「女性神学」について
- 彼らはなぜ教会から離れたか？
- （第三回）『正教神学概論』—創造—

- 岡田友季子 P・レイクランド
- M・C・L・ビンゲメル
- A・J・ベヴィラクラ
- 有村 浩一
- F・ジョージ
- C・A・ポバート
- K・キルビ
- W・J・バイロン
- V・ロスキ

上智大学神学会
神学ダイジェスト編集委員会
東京都練馬区上石神井4-32-11
〒177-0044 Tel & Fax (03) 3594-4349
E-mail shing-dt@netjoy.ne.jp

日本人の原初的宗教意識とは何か？
佐々木勝彦著

日本人の宗教意識とキリスト教



井ノ川 勝

評者である私は神学校を卒業し、伊勢神宮外宮の前にある日本基督教団山田教会で三〇年間、伝道者として伝道してきました。日本人の魂の故郷と言われる伊勢神宮の町に生きたる人々の心に響く福音の言葉を求め格闘してきました。伝道するために、伝道の対象である日本人の深奥にある原初的宗教意識を知る必要があります。今年四月より真宗王国北陸金沢に遣わされ、そこで日本で伝道する伝道者にとって必読書とも言える意欲作である本書に出会いました。

著者は東北学院大学教授として、日々大学生と向き合い、その心に触れ、御言葉を語り続けています。目の前の若者たちが島国日本の中で、仲間内にだけ通じる言葉で内向きとなり、「愛国心」にからめとられ、「世界史」を無視する姿に接してきました。また、キリスト教教育の現場にも、国の道徳教育導人を巡り、再び「和魂洋才」の思想が持ち込まれようとしています。「和魂洋才」とは何であり、「和魂洋才」の発想それ自体に致命的欠陥があるとしたら、日本そのものを滅ぼすかもしれない。このような危機意識から生まれたのが本書です。

本書は「日本人の無宗教」「日本人の選択基準」「日本人の無意識」「日本のキリスト教」「日本の神学」の五つの章より構成されています。それぞれの主題について論じた代表的な書物を複数紹介し、その要点を的確に論じ、最後に著者の見解を語るという展開をしています。

第一章「日本人の無宗教」では、阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』、島田裕巳『無宗教こそ日本人の宗教である』、山折哲雄『日本の「宗教」はどこへいくのか』を紹介し、「無宗教」といわれる日本人の宗教心の起源を日本宗教史全般の流れから探り、神仏習合のみならず神仏儒合一という独特な宗教形態があり、近世に入ると政治が宗教をコントロールする世俗化の流れが出来上がり、近代に入ると新たな祭政一致の宗教、国家神道が作り出され、戦後、既存の宗教に対する不信感が強まり、「無宗教」と言いつつスピリチュアリズムの感覚に生きる人々が多くなったことを論じます。第二章「日本人の選択基準」では、中村元『日本人の思维方法』、山本七平『受容と排除の軌跡』を紹介し、仏教、キリスト教という外来の思想を受

容する際、民族宗教である神道がどのような影響を受け、また逆ほどのような影響を及ぼしたのか。その際、日本人の選択基準とは「シャーマニズム的思维方法」「アニミズム的に規定された共同体意識」であると論じます。第三章「日本人の無意識」では、土居健郎『甘え』の構造『信仰と「甘え」』、河合隼雄『母性社会日本の病理』『中空構造日本の深層』を紹介し、深層心理学の視点から日本人の無意識にある「甘え」「中空均衡構造」を追求します。中心となる唯一の権力者は必ずしも力を持つことを必要とせず、うまく中心的な位置を占めることにより、全体のバランスを保つ構造です。その最たるものが天皇制です。第四章「日本のキリスト教」では、マーク・R・マリンズ『メイト・イン・ジャパンのキリスト教』、原誠『国家を超えられなかつた教会——15年戦争下の日本プロテスタント教会』を紹介し、明治以降キリスト教受容において、日本の重層的信仰形態や国家形態に合わせて、より日本的なものにしようとして、「日

本的キリスト教」となっていく日本プロテスタント教会の問題点を論じます。第五章「日本の神学」では、古屋安雄・大木英夫『日本の神学』を紹介し、日本を神学の視点から考察する「日本の神学」の必要性、「和魂洋才」に代わる「宇魂和才」というエキユメニカル・スピリットの必要性を論じます。『日本の神学』が出版されてから二五年、残念ながらその後「日本の神学」を展開することは十分になされてきませんでした。本書は改めてその問いかけに真摯に答えて行こうと促しています。この課題にどう応えていくのか、それが日本で伝道する私たち伝道者の使命です。

(いのかわ・まさる 日本基督教団金沢教会牧師)
(四六判・二八〇頁・本体一九〇〇円＋税・教文館)

聖書にもとづく クリスマス物語

藤原孝行「著」

イエス様誕生の
T・P・O



新刊
宿屋とは、飼いやおけとは、クリスマスとは、誰のための物語か。世界で一番はじめのクリスマスは、イエス様とマリヤとヨセフ、それに野宿して羊の群れの番をしていた羊飼いたちと家畜だけの質素で厳粛なものでした…… *四六判・二〇〇円＋税
◆聖書にもとづくイエス様の受難と十字架 *五〇〇円＋税

わが家が天国になった

錦織淑子「著」 わが家に訪れた恵みの証し他



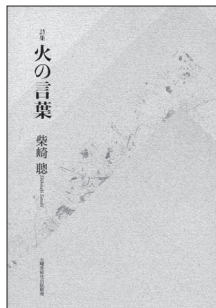
新刊
“天給自足”の暮らしもまた愉し！
4人のこどもの母として経験した
祝福といつくしみ、自身伝道者として
の恵みにあふれた半生を静かに
ふり返る、また多忙な牧師を支
え続けたその生涯！感動です。
*B6判・二二四頁・一〇〇〇円＋税

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
自費出版の専門出版社

「物」から「いのちの尊厳」を見る詩群

柴崎 聰著

詩集 火の言葉



川崎正明

著者は長らく編集者として活動し、文学についての造詣を深め、すでに『伏流の石』など一〇冊以上の詩集を出版している。今回の詩集は、美術展で見たものや散文形式で表現した詩など新しい試みが見られる。同時に多くの人々の死に向き合うことで、「いのちの尊厳」をコンセプトにして自己の内奥を深く見つめようとする内容となっている。

ごくありふれた日常の事象や風景が描かれ、作者のこのころの中に移される。「扇風機」「瓦」「蟬」「クロアゲハ」「ハエ」「辞典」「風呂場」「裸電球」「洗濯物」「障子」等々、それらが著者の集中心力によって巧みな言語で表現されている。「物」が「もの」になり、いのちの言葉を奏でる。その音を聴き、問いかけ、このころの扉を開く。散文形式で詠まれた「テレホンカード」という詩がおもしろい。「廃棄の時は、刻々と近づいている」この薄っぺらな平板の中に残った磁気の内容量を「埋蔵金」と称して、「まだ生きている」と言う。著者は一枚のテレホンカードという「物」から、人間の「いのち」を見ている。息切れが近い人間の、なお生きようとする生命力を見捨てないの

だ。

人々の死に立ち合って著者が感じたことは「死者の尊厳」である。それは同時に生の尊厳を語ることもである。「遺骨」「犠牲」「蟬」「釘」「火の言葉」などに意味深く詠まれている。「遺骨」という散文詩は、父の死と火葬される生々しい場面と向き合って、九十八年を生き抜いた父の人生を深く思う。そこに生と死、彼岸と此岸の狭間に立つ人間ドラマを見ている。

「蟬」という詩の激しい描写に圧倒される。蟬の死骸を恐ろしいほどリアルに観察している。「焦熱の土にあおむけに転がり(略)すべてを天に委ねた恰好で」「触角を慎ましく跳ね上げ」口吻を胸まで垂らし/前脚を折り曲げ 中脚を胸で畳み/悟りを開いたように後ろ脚を座禅組みにし、その結末は、真っ黒な蟻の大群が群がる「がらんどうの屍体」となる。なぜここまで蟬の死体をリアルに描写したのか。それは蟬が懸命に生き抜いたことの逆説的な表現ではないかと思う。

「釘」と「火の言葉」という詩にも注目した。ともに人の葬儀と火葬の情景であるが、後者は「一人の神父のご遺体に接し

て生まれて来た詩」(「あとがき」)である。共通の言葉として「ヒノキの柩」が取り上げられているが、この詩の風景の大切な役割を担っている。その柩の中と外をめぐって、生と死のドラマが演じられている。火葬場は目に見える人のいのちを峻別する残酷な場である。そこでは「消えたもの」と「残ったもの」が特別な意味を持つ。魂の昇華の後に残ったものは、「魂がないと見なされた釘」だったとの視点がおもしろい。特に印象的なのは、「遺族たちは談笑しながら霊柩車へと向かった」という最後のくだりである。魂を天に送るといふ厳粛で悲しみの中にいた人たちが、事が終われば「談笑しながら」立ち去る。この落差は何か、著者はその風景を見事にとらえている。

「残ったもの」の特別な意味を詠んだのが「火の言葉」であろう。一人の神父の葬儀に立ち合って凝視した著者の真剣な眼差しを想像する。柩の中の遺体は故人の全人生を凝縮したものである。ヒノキの柩、中に入れられたもの、埋め尽くされた

花々が炎上、そして遺体へと類焼する。残ったものは何か。「骨の深みにまで紡いだ言葉が取って置ききの火となる」というこの詩の最終行に、詩集のタイトル「火の言葉」が重なる。「骨の深みにまで紡いだ言葉」が故人の尊厳を守り、生きた証しとなる。この表現は、本書の扉に記された「その言葉はわたしの心の中、骨の中に幽閉されて火のように燃え上がります」という旧約聖書エレミヤ書二〇章九節にある。神父の遺体に接した時の想いを、エレミヤの預言と重ねて詠んだのであろう。神の言葉を取り次ぐ神父にとって、その言葉は愛でありいのちである。それは火葬場の炎でも燃え尽きないのである。

限られた紙面に書き尽くせないが、いのちとしての言葉を表現しようとする詩人の熱い想いが伝わってきた。
(かわさき・まさあき) 関西学院中学部元宗教主事、公益社団法人好善社理事
(A5判・八〇頁・本体一四〇〇円+税・土曜美術社出版販売)

新刊

Kemajuan dalam Gereja Baptis Tokyo
Kemajuan-Kesaksian Rohani dari Gereja yang Sedang Bertumbuh di Tokyo, Jepang
Akira Watanabe

◆英語版に続く「インドネシア語版」……非常に実践的であり、生活に根ざした具体的な適用を伴った信仰であり、魂を追い求める非常に伝道的な姿であり、目的をしっかりと定めた教会の姿である。(日本語版書評より・錦織寛師：日本ホリネス教団・東京中央教会牧師) * A5判・一三〇頁・八〇〇円+税

既刊

Dynamism of Tokyo Baptist Church
Spiritual Testimonies from a Growing Church in Tokyo, Japan
Akira Watanabe

社会学的な視点も大切に、教会のあり方を検証したフィードバックストーリー! 好評の『東京バプテスト教会のダイナミズム』の英語版! 資料や記述は最新版をもとに改訂されています!
* A5判・一二〇頁・八〇〇円+税

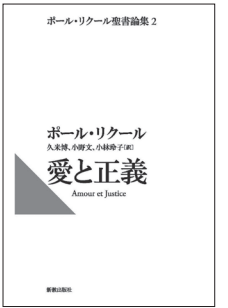
株式会社ヨベル YOBEL Inc.
info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
自費出版の専門出版社

聖書の読み方に対するあくなき省察
ポール・リクール著

久米博、小野文、小林玲子訳

愛と正義

ポール・リクール聖書論集2



阿部善彦

本書『愛と正義』は、『ポール・リクール聖書論集』の第二巻であり、既に第三巻『物語神学へ』、別巻『死まで生き生きと——死と復活についての省察と断章』が公刊されている。リクールは日本でもよく知られているが、通常は、キリスト神学者、聖書学者としてではなく、哲学思想家として紹介される。神学者、聖書学者としてのリクールが日本で軽視（無視？）されてきた背景には、リクール自身が、哲学的著作と神学・聖書の著作をはっきり区別していたこともあるが、この『ポール・リクール聖書論集』では、紹介されないままであった様々な神学・聖書の論文を読むことができる。

この『ポール・リクール聖書論集』は、既に公刊された論文集を丸ごと翻訳したのではなく、訳者のひとり、久米博氏がリクールの様々な発表論文から独自に吟味・選定したものである。各巻の個別テーマはリクールの根本的な問題関心のありかを照らし出し、各巻に収録された諸論文は、リクールの思索がいかなる道行きを巡り、どこへと辿り着いたのかをわれわれに克明に伝えるドキュメントとなっている。その意味で、リクールの

全体像を見渡す上で欠かすことのできない文献であると言える。このたび公刊された『愛と正義』は、リクールの哲学的著作「他者のような自己自身」（一九九〇年）と『記憶・歴史・忘却』（二〇〇〇年）のあいだに発表された以下の七論文を収録する。「宗教の哲学的解釈学——カント」、「問題の『黄金律』」、「聖書の言説における声と書の絡み合い」、「理解を求める信仰——その聖書的先例?」、「一つの聖書からもうひとつの聖書へ」、「愛と正義」、「翻訳という範型」である。各論文は巻末の「訳者解説」に詳しく説明されているので、ここでは、私の所感を述べたい。

まず論文タイトルにある「カント」「アンセルムス」に目がゆく。しかも、リクールがそこで取り上げるのはカントの『もっぱら理性の限界内の宗教』であり、アンセルムスのいわゆる「神の存在論的証明」である。通常、それらは、いわゆる「純粋に聖書と聖書に基づく信仰に立脚する神学」とは異なる、『哲学』に属する議論とみなされる。また「愛と正義」や「黄金律」にしても『倫理』の問題と見れば、本書全体に同じこと

が言えよう。

このことはわれわれに『聖書』『神学』と『哲学』『倫理』の『あいだ』についての問いを投げかけてくる。その『あいだ』は、われわれの没世間的な先入見によって引かれた暗黙の境界線に過ぎない。だが、本巻収録の論文の中で、リクールは、『あいだ』として『聖書』『神学』からも『哲学』『倫理』からも放置されたこの「空白地帯」を慎重に吟味してゆく。それはもちろん折衷主義的ではない。むしろ、それぞれ、境界線の手前で停滞している『聖書』『神学』、『哲学』『倫理』を、リクールの徹底した思索と読解によって、各々の最深部から突き貫けるのである。われわれは、そこで、創造的息吹のかよう、新しい理解可能性に満ちた思想空間がひらかれてくるテキスト読解をとともに経験する。

この経験は、根本的に、リクール自身の聖書テキスト読解の経験に支えられている。本書は、そこで極めて重要な意味を持

つ聖書学者ポール・ボーシャン（イエズス会士）にも光を当てる。ボーシャンの重要性は本書収録の「一つの聖書からもうひとつの聖書へ」に明確である。リクールがプロテスタント、カトリックの境界を超えた人と人のかかわりの中で、その共同作業の中で、自らの聖書テキスト読解を深めていったこと、また、それに呼応するようにカトリック側がリクールの聖書解釈を受けいれていったことは「訳者解説」と久米氏による「補論」に詳しい。本書を通じて鮮明になったリクールの聖書読解の道行きは、われわれの聖書読解が、各自が思い描く境界線の手前で勝手に停滞・閉塞してはいないか強烈に問いかけてくる。

（あべ・よしひこ 立教大学文学部准教授）
（四六判・二九〇頁・本体三三〇〇円＋税・新教出版社）

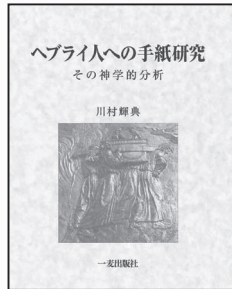


ヘブライ人への手紙研究

その神学的分析

川村輝典

Akinori Kawamura



研究の結晶

長年にわたって「ヘブライ人への手紙」と取り組んできた著者による、論文と講演。

A5判・上製・函入
定価【本体4,200＋税】円
ISBN978-4-86325-063-5



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

祈りのあり方を知るために
鈴木崇巨著

礼拝の祈り 手引きと例文



高田和彦

昔の話です。福音系女子高でのことです。ある生徒がクラス別礼拝のためにあらかじめ祈りを準備し紙に書いて用意して本番で祈ったところ、担任の先生から、祈りはあらかじめ書いて用意するものではない、と注意されたこと、シヨックを受け、所属教会の牧師に訴えてきた事がありました。

このことは現代の日本のキリスト教会の礼拝事情を象徴しているように思われます。ところがカール・バルト先生は、かつてあるところで逆のようなことをおっしゃいました。曰く、前もって準備し、用意しないような祈りはダメだ、と。当然そこには紙にあらかじめ書いて準備し、吟味することが含まれるでしょう。奉仕する礼拝の中心部分を担う祈りをどう受け止めるかによって、礼拝そのものに対する姿勢が問われます。礼拝の中心は説教であると強調し、それが過ぎると、礼拝は説教という聖書講演会として受け止められ、そこに集まる人々は前奏から後奏までの生の神礼拝の霊的営みに参列し、それを構成する一員になるという観点が失われます。説教を聞くだけならば、テープやCDで聞けばよいのであって、わざわざ礼拝堂に赴く

必要はなくなるでしょう。

礼拝を司る者の責任は重いと言わざるを得ません。上記の例でも、それぞれに言い分や根拠があるのは承知しています。最近でこそ、多くのプロテスタント教会において、礼拝のあり方を整える傾向が出てきました。そのことはおおむね好意的に教会の現場では受け止められています。しかし、その志に供するところの参考の情報が不足しているとも言えます。礼拝学、典礼学などの学問は確かにあるでしょうが、それらと教会の現場との隔たりはかなりなものがあのように思われます。

本書は、その理解の距離を埋めてくれるものです。常に、時と場合をわきまえた祈りが求められます。すべてが、いわゆる「自由祈禱」で済み、結果祈禱者が自ら確信し、ある程度の質の高さと客観性を保つことができるなら、それはそれでよいでしょう。しかしすべての人に可能かどうかは別でしょう。実際の礼拝現場では、責任を果たそうとする者には、相当のプレッシャーがあるのではないでしょうか。

何事も基本が大切です。スポーツ、音楽や習い事でも、そし

て祈りにおいてもです。自由祈禱といわれても、自由の何たるかを知らずに、基礎がなければ自由にさえ祈れない。自由祈禱とは言っても、聖霊の導きを信じて祈るのであって、勝手な祈りとは違います。と言う事は、何らかの導きが必要はなればなりません。あるべき本来のあり方を知った上で、聖霊に促されて神に祈るところに、バリエーションは生まれるのです。

以上の意味で、本書はその基本を提供してくれる最適の書です。もちろん、そのまま鵜呑みにする必要はないでしょう。むしろ、それぞれのケースにふさわしく応用すればいいのです。

一〇六ページほどに「牧会祈禱」がまとめておさめられています。さらには親切に「献金祈禱」の例文もあります。献金の祈りは、説教のまとめでもないし、神さまへのお願いでもない。礼拝に出席できたことへの感謝であり、献身のしるしの表明です。

いちがいに一つの礼拝の形が正しいとは言いい切れな

う。牧師が、単なる説教者以上の者でないならば、説教担当長老としての役割を果たせば十分で、礼拝の司式、進行は他の長老がすればいいのかもしれない。しかし、牧師が教会の牧者であり、信徒の群を導く立場の者であるならば、教会の群を導く牧者に力強く祈ってもらいたいというのが、信徒の願いでしょう。

礼拝は、神さまと人間との上下のやり取りに終始するように構成されています。さらに本書では、「招詞」と「祝禱」にも

ていねいに触れています。礼拝の冒頭で「さあ、礼拝しよう」と招き、締めくくりにおいて「さあ、この一週間世に出て行って主を証ししよう」と送り出される、いわばコインの表と裏の、牧師と信徒の水平の関係であると説明しています。

(たかた・やすひこ 日本基督教団九段教会牧師)

(四六判・一六六頁・本体一四〇〇円+税・教文館)



マタイによる福音書

8章から12章の説教

林 勵三
Reizo Hayashi



「天国が近づいた」と
宣べ伝えよ――

わたしたちは
(知っている者)ではなく、
(行う者となる)ことによって、
キリストの証人となる。

その〈喜び〉と〈励まし〉!

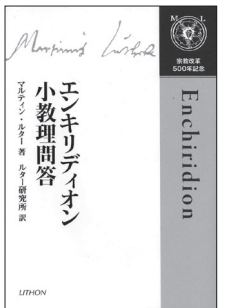
四六判
定価 [本体 1,700 + 税] 円
ISBN978-4-86325-073-4



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

エンキリディオン（信徒必携）の書
 マルティン・ルター著
 ルター研究所訳

エンキリディオン 小教理問答



内海 望

二〇一七年の宗教改革五〇〇周年は、教会史の新しい転機となる可能性を秘めています。

それは、一九九九年一〇月三十一日に、アウグスブルクで調印された『義認の教理に関する共同宣言』に象徴されるように、長年に及ぶ努力の結果、ルーテル教会、ローマ・カトリック教会共に、自らの主張を相手に投げかけ合う姿勢でなく、「共通点の発見」「一致」に向かって歩んでいるからです。

年一回、五十回にも及ぼうとする長い熟議を重ねて来た両教会の正式メンバーによる「一致に関するルーテル⇨ローマ・カトリック委員会」は、二〇一三年『争いから交わりへ』(From Conflict to Communion)と、二冊の文書を発表しました。題名から容易に察せられるように、両教会の一致(和解)への意志が明確な文書です。来年早々に、日本語訳も出版される予定です。日本福音ルーテル教会も、早くからルーテル世界連盟と連携しつつ、上述の合同委員会のメンバー教会として、両教会の対話に参加して来ました。

このような歴史のうねりの中で、「改革された教会は、常に改

革されねばならない」という理念のもとに歩んで来たルーテル教会も「刷新」を強く意識して五〇〇年に向けて歩んでいます。その一つとして、今までルーテル教会の遺産として大切にしていた文書を、もう一度、新しい光のもとで読み直し、翻訳するという作業を、ルター研究所が始めました。時宜にかなった企画です。今回出版された『エンキリディオン 小教理問答』が第一弾です。

これは、『小教理問答』として、主に、洗礼や堅信の準備の書物として教会内で用いられてきました。従って、翻訳も用途に従って、「教理問答」の部分に限定されました。

しかし、この書物は元来、ルターが教会巡察者として、教区内を回った時に、キリスト者と呼ばれており、洗礼を受け、聖餐にも与っていても、福音を理解せず、主の祈りも、使徒信条も十戒も知らずにいるという教区民の「悲惨な窮状」を見聞きし、何とか福音の喜びを人々と分かち合いたいという強い愛の思いに迫られて執筆した書物なのです。

戦う改革者ルターよりも牧会者ルターが前面に出ている書物

なのです。そのようなルターの目指したところを踏まえて、今回は「教理問答」に限定せず、全文が翻訳されています。更に、ルターが「キリスト者が必ず持ち歩くべき書」という思いを込めて表題に「エンキリディオン」(信徒必携)とつけたことを尊重し、これを表題に掲げています。

また、これが家庭内で用いられることを想定し、父親(母親)が、子どもの素朴な「これはなんですか」という問いに答えるように編纂されていることを考えて、文体も執筆意図にふさわしく整えられています。親と子の素朴な対話として読んでいくと、温かい雰囲気と、子どもと共に福音を喜びたいというルターの心が感じられる書物であることに気付かせられます。

更に、従来、『小教理問答』では省かれていた「懺悔」の項を加え、更に家訓、結婚式文、(嬰兒)洗礼式文も全文翻訳されています。子どもが成長し、やがて結婚し、子どもが与えられるという人生の歩みを考えながら書かれた、まことに細やかな

な配慮を感じさせる牧会の書であることに眼を開かせられました。親子で、また孫も含めて、共に「朝の祈り」「夕の祈り」を祈っている姿を思い浮かべると、自然に口元が緩みます。まさに人生を日々歩む中での「必携の書」です。結婚、嬰兒洗礼の意味も時代の相違を越えて私たちの心に響くものがあります。この小冊子が、当時の社会に大きなインパクトを与えたように、キリスト者のみならず現代の家庭生活全般に新しい息吹を与えることは間違いありません。

神と人間に対して、その波乱にとんだ人生経験から深い洞察力を深めて行ったルターの書物であるだけに、その内容は、時代を越えて私たち一人一人に生きる確かな道筋を示す内容を持っています。多くの人々に触れて頂きたい書物です。次の『アウグスブルク信仰告白』の翻訳も待たれます。

(うつみ・のぞむ⇨日本福音ルーテル教会牧師)
 (B6判・一二三頁・本体九〇〇円+税・リトン)



エンキリディオン 小教理問答

ルター著●ルター研究所訳
 ●B6判並製 ●定価：900円+税

日本福音ルーテル教会
 宗教改革500年記念事業
 推奨図書

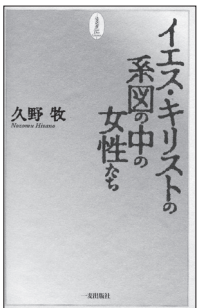
ルターがキリスト者、またその家庭のために著した『エンキリディオン(必携)』の新たな全訳。本書の歴史的意義とそれが現代社会に持つ意義とは、徳善義和ルーテル学院大学名誉教授(ルター研究所初代所長)による「まえがき」と巻末の「解説」によく示されている。

ISBN978-4-86376-038-7

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
 FAX 03-3238-7638

救いの歴史としての系図を精読する
久野 牧著



関田寛雄

イエスキリストの系図の中の女性たち

マタイ福音書一章一七節の「イエスの系図」は、新約聖書に関心をもって読んでみようと思う者にとっては真に大きな「蹟き」となる箇所であり、読む気を失わせて遂に「聖書を積ん読」という状態に追い込まれやすい。しかし筆者にとってはこの箇所は聖書の中で最愛の部分であり、クリスマス前後には必ず説教で取り上げる箇所である。そしてその重要な意味内容をこの上なく丁寧に講解してくれているのが、本書である。系図とはある意味で歴史上の要約であり、その中に現れる人物名の取捨選択により、その編者の歴史理解が明白となる。この系図は端的に言ってアブラハムからイエス・キリストに至るまでの神の救いの歴史の展開である。「その神の救いの歴史の中で、神によって用いられた女性の中から、特に四人に目を向け、さらにマリアに注目しているのが、この系図の特徴です」（一〇二頁）。本書の手引きに従ってこの箇所を「精読」するならば必ず「愛読」の聖書箇所になることであろう。

この系図に登場する女性はサラとかラケルという有名な女性ではなく、四女性は「異邦人」であり男性によって「負」の条

ド、すなわちダビデ王の祖父である。捕囚後のダビデ王朝の再建をめざす超民族者、エズラ、ネヘミヤ体制への抵抗文学としてのルツ記の目的も憶えておいてよいであろう。「ウリヤの妻」という表現によって系図はダビデの姦淫の罪を告発してしまう。バト・シエバはダビデに犯されて夫ウリヤは謀殺されてしまう。「罪は何よりもダビデの側にあるのです。……み子イエス・キリストは、イスラエル以外のすべての異邦人……のための救い主であるとともに、すべての罪ある人間の救い主として、この世にお生まれになったのです」（一六八頁）。

最後は「マリア」である。しかし彼女についての情報は殆ど無いに等しい。ルカ福音書一章三六節の「洗礼者ヨハネの母エリサベトの親類」とか「身分の低い、この主のはしため」（ルカ一・四八）位から想像するほかはない。ルターは、マリアは当時十四歳位の孤児だと想像している（『クリスマス・ブツク』）。この系図はいわゆる血縁の連続を語ってはいない。イエ

件を負わされながらも果敢にそれに立ち向かいつつ、イスラエルの歴史、特にユダ家の歴史に流れる神の救いの業に用いられた女性たちである。「タマル」は創世記三八章に「ラハブ」はヨシユア記二章に、「ルツ」はルツ記に、「ウリヤの妻」はサムエル記下二一章に、それぞれの物語が記されている。しゅうとのユダから冷たくされた「タマル」は「必死で自分の生きる道を切り拓こうとしています。……彼女はひとりの人間としての自分自身の存在価値を求め続けています」（二〇頁）。「ラハブ」はエリコの町で遊女、娼婦として働いていた。そこに現れたイスラエルの斥候たちはやがてエリコの町を占領しそこに新しい解釈の秩序を生み出すと「ラハブ」は考えたかもしれない。そのような「取り引き」も「神の恵みを求める祈りの一つの表れ」として理解することもできます（三五頁）。「ルツ」は「ナオミ」に同伴することで、ユダの国の寄留の人となった。「ナオミ」の優しさに応えて「ルツ」はイスラエルの神を信じ、「落穂拾い」に出かけて老いた「ナオミ」を養う（ミレーの絵を想起しよう）。やがて「ボアズ」と結ばれて生まれたのは「オベ

スは血縁的にヨセフの子ではない。マリアの生んだ子をヨセフはその家系に組み入れたのである（マタイ一・二〇以下）。そこで「イエスは、ヨセフの子となり、それゆえにダビデのすえとなるのです。そのように認知されるのがユダヤ社会のあり方でした」（九〇頁）。この系図は三期に歴史を区分し、それぞれ「十四代」で締めくくっている。率直に言って正確とはいえない「十四代」にこだわるマタイの文学的な技巧について、蛇足ながら付記しておきたい。ヘブライ語でDは4でありWは6である。DWDつまりダヴィド、すなわちダビデにこだわるマタイの技巧による系図編集の意図も記憶してよいであろう。本書によって、神の救いの歴史としての系図を「精読」したいものである。

（せきた・ひろお 日本基督教団神奈川教区巡回教師）
（四六判変型・一〇六頁・本体一四〇〇円＋税・一麦出版社）



イエス・キリストの系図の中の女性たち

久野 牧
Nozomu Hisano



マタイ福音書の系図にその名をもって登場する女性たちは、固有の意味や理由があつて、神の救いの歴史の中で用いられている者たちである。私たちに与えられている役割は？

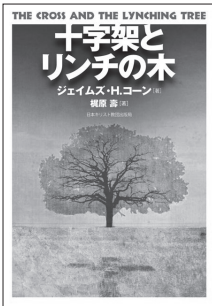
四六判変型・並製
定価【本体 1,400 + 税】円
ISBN978-4-86325-069-7



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

黒人差別からの解放と、無関心の罪からの贖い
ジェイムズ・H・コーン著
梶原 壽訳

十字架とリンチの木



荒瀬牧彦

南部の木には奇妙な果実がなる、／葉には血を滴らせ、根にも血を滴らせ、／南部の風に揺らいでいる黒い死体、／ポプラの木から吊るされている奇妙な果実。

——「奇妙な果実」

ビリー・ホリデイは身じろぎもせず、祈るように、あるいは内に秘めた怒りと苦痛を抑えつけるようにして歌う。彼女はこれを歌うとしばしば気分が悪くなったという。あまりに過酷な現実を背負っていたからだ。しかし彼女は歌い続けた。本書の著者、ジェイムズ・H・コーンはそれを「預言者の呼びかけ」と言い、それが「白人優越主義に対する戦闘的敵対精神を注入」し、「その精神が現代の公民権運動とブラック・パワー運動においてその表現を見出すことになった」と語る。

この歌だけではない。コーンは、執拗で悪質な暴力に苛まれながらも、決して屈せず音楽や詩や小説という芸術の武器をもって、尊厳を守るための戦いを続けた人々の声を丹念にひろいあげる。「黒人霊歌とブルース」（原著一九七二年）以来、黒人の生の声を最重要証言として聴き取り続けてきた著者の力が遺

憾なく發揮され、我々は、白人支配下のアメリカの社会や教会からは決して聞くことのなかった魂の叫びを聞くことになる。

驚かされるのは、黒人表現者たちがまるで申し合わせたかのように、リンチで殺された人々を十字架につけられたイエスと重ねていることである。「彼をリンチせよ！ リンチせよ！ おお、何と言う野蛮な叫び、／なぜあなたがたは、『十字架につけよ！』と同じことを言うのか（カレン）。「彼らは彼の肉を引き裂き、骨を打ち砕き、／そして彼の呻き声に勝利の歓声をあげた。／彼らは彼の指を切り落とし、耳を切り取り／そしてそれらを土産品として配った」（ホーキンス）。「最も聖なる私生児／口からは血を流している、／黒いほ Kristus／南部の十字架にかかっている」（ヒューズ）。

十字架とリンチの木には明らかな類似性がある。しかしこの両者は無関係であるかのように扱われてきた。コーンはそれに強く異議を唱える。我々がキリストを、再び十字架につけられた（re-crucified）黒人の死体と同一視するまでは、アメリカにおいてキリスト者であることの意味は理解不能であり、奴隷

制と白人優越主義の深い罪から救い出されることはない。それはただ黒人の解放のためだけでなく、無関心と沈黙を通してきた白人たちを罪から贖い出すためでもあるのだ、と。

本訳書の出版後間もなく、ミズーリ州ファーガソンで十八歳の黒人男性が警官に射殺される事件があり、その不条理への憤激が暴動へと発展した。怒りは深いのだ。「リンチ」は今も形を変えて続いている、現在進行形の問題である。

本書の第二章はラインホルド・ニーバーへの批判である。なぜ人間と共同体の罪の問題をあれほど深く分析し、同時代の政治指導者にささげ影響を与え得たキリスト教社会倫理の第一人者が、これほど明白な人種差別の罪に対して語らなかつたのか。なぜ十字架とリンチの木の結びつきが見えなかつた（見えないことにした）のか。彼が米国史を論じた『アメリカ史の皮肉』は、「人種問題をいかなる実質的仕方でも取り扱っていない」。これ以上の皮肉があるだろうか。ユニオン神学校での後任教授

聖公会出版

——新刊案内——

記憶の癒し

アバルトヘイトとの闘いから世界へ

著者：アバルトヘイト、ツツ大主教らとともに
訳者：マイケル・ラフスレー 監修：西原廉太

著者は、アフリカのアバルトヘイト撤廃運動家として敵身、そのため一九九〇年手紙爆弾テロに遭い、両手と片方の目の視力を失った。その体験から苦難にある人々の癒しの旅路に寄り添うことを選び取った。本書はその感動の軌跡を綴ったもの。故ネルソン・マンデラ元大統領が絶賛した話題の一冊。

新しい創造

聖書を読むために

著者：太田道子

著者は聖書を読むための基本事項を分かりやすく説明し、神と人間の関係を明確にする。それはキリスト教のみならず教会の外にいる人々にも語りかけるものである。そして聖書を読むことは人が現実的に正面から向き合い、人間と社会を癒すための力となることを示す。多くの人が待望していた碩学太田道子の新たな著作。

ユーカーリスト

新たな創造

著者：ウィリアム・ロケット
監修：竹内謙太郎 訳：後藤務

クリスチャン共同体の中心となるユーカーリストの伝統について、新約時代、中世、宗教改革時、近代、現代までの神学的解釈を網羅する。著者のクオケットは、バンクーバー神学校の組織神学教授。欧米の多くの神学校の教科書となっている定評のある一冊。

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nssk-bookshop@company.email.ne.jp

多彩なテーマで紹介する
嶺重 淑、波部雄一郎編

よくわかるクリスマス



八木谷涼子

「教会でもクリスマスやるんですか？」と聞かれました。ある牧師さんからそんな話をうかがったのは一九九〇年代のこと。おおかたの日本人にとつてのクリスマスは、宗教とは関係がない。電飾の輝くツリーが飾りつけられる時期になると、書店の棚もクリスマスを意識した日用品揃えとなる。さて、『よくわかるクリスマス』とはいったいどんな本だろうか。

そう思いつつページをめくると、テーマの多彩さに圧倒された。一三の章でじつに幅広くクリスマスの事象をカバーしている。歴史的観点からクリスマスの起源及び成立事情を語る第一部。中国や韓国を含む世界各国と日本におけるクリスマスの現状を語った第二部。文学、美術、音楽、映画などの文化とクリスマスとの関係を扱った第三部の三部構成。加えて、クリスマスに関するさまざまなトピックを扱った一四本のコラム、巻末には「クリスマス用語集」が収録されている。

しかも章ごとコラムごとに執筆者が違う。どうやってこれほどのメンバーを集めたのか、編者あとがきを見て納得した。本

・サンタの存在をいつまで信じていたか、大学生に質問したアンケート結果を掲載（彼らにはそんなに昔の話ではない！）

個人的には、桐藤薫氏による中国の話（第8章）が目新しかった。中国では二〇〇八年の北京オリンピックを境にクリスマスの認知度が急激に高まり、大勢の非信者が教会に足を運ぶようになったことで「クリスマスとは建国以来の（国家による）宗教管理の前提を揺るがす出来事」になったという。また、「聖ニコラオスの島」発掘の話には想像力をかきたてられた（第3章）。スイス版のサンタクロースが家庭訪問する際の「メモ」や料金表、スイスやドイツなどの地域で一月六日にツリーの火災が原因の死者が出ること（第5章）。由木康による「きよしこの夜」の訳詞の変更問題などが興味深い（コラム13）。

「本来の」あるいは「本当の」クリスマスという言い方があ

書の土台は関西学院大学で十数人の教員が交替で行った講義「キリスト教と文化 クリスマス——その起源と展開」の授業テキストである。大学教員の執筆だけあって、やや学術的な記述もあり、まったくのキリスト教初心者向けというよりは、歴史書などを読み慣れている人向けという印象を受けた。ほかに気づいたことを簡条書きにしてみよう。

・一般的な索引はないが、巻末の用語集にある程度の索引機能を持たせている

・より深く知りたい人には、各章末尾の参考文献リストが便利・トリビアが満載で、説教などのネタ本としても使えそう。新しい情報も含まれているので、クリスマス関連本はもう何冊も所持している、という人にも発見があるはず

・書かれている事象の特色が地域性によるのか、あるいは教派的なものか、その区分けが明瞭でない箇所がある。「正教会の降誕祭」というコラムで東方正教会のことを扱っているが、「カトリック」という文言の入った特別な項目はない

る。その背後には世俗的・商業主義的クリスマスを「偽物」とみる評価があるように思う。だが本書の基調は違う。本物とはなにかを意識しつつ、日本では「商業的なイベントの中にもむしろ、本来のクリスマスの意味を伝える工夫がなされ、クリスマスが人々の中に定着している現実」（コラム10）を認める記述もある。わたしにはそこが新鮮だった。

いわゆるキリスト教国においても、クリスマスはもう教会だけ、信者だけのものではなくなっている。四世紀に日が定められ、長い年月をかけて土着の文化と融合し、地域的特質が付け加えられながら、多彩な手法で祝われる文化的な休日。クリスマスがそんな存在であることがよくわかる一冊だ。

（やぎたに・りょうこ＝フリーランスライター）
（A5判・二二六頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

キリスト教人格教育論 —— 個人の尊厳を見つめて

東洋英和女学院大学教授 吉岡良昌

◆二十七年に及ぶ、キリスト教に基づく人格教育の探究と実践。

すべての教育は個人の尊厳を基盤とするべきであり、その実践にはキリスト教の人間理解と価値観が不可欠であることを、南原繁、森有正、コメニウス、エリクソンの主張に触れながら、歴史的に立証。ミッションスクール意義も問う提言の書。

春風社の新刊



定価 本体三〇〇円＋税 ◆四六判上製◆二四八頁

春風社

〒220-0044 横浜市西区
紅葉ヶ丘53 横浜市教育会館3F
info@shumpu.com
http://www.shumpu.com
TEL 045-261-3168/FAX 045-261-3169

東方諸教会を知るための格好の手引き
アズイズ・S・アティーヤ著
村山盛忠訳

東方キリスト教の歴史



辻明日香

この夏、イラク北部のキリスト教徒がIS（イスラム国）から迫害を受け、先祖代々の土地を追われ難民となっているという痛ましい知らせが相次いだ。このような報道に接した際、イラクにはキリスト教徒がいるのかと不思議に思われた方もいらっしゃるかもしれない。彼らは十字軍の置き土産でも、化石のように残った古代教会の一派でもなく、古代から現代まで連続と続く、東方キリスト教諸教会に属する人々なのである。

『東方キリスト教の歴史』の著者であるアティーヤは、本書の序文において、「かつて輝かしい栄光の歴史をもった教会が、今日余りに無視されている」と述べている（四頁）。本書の読者設定は西方教会に属する人々であり、描き出すのは東方キリスト教諸教会の今日までの営みと、その伝統と文化である。

著者アズイズ・S・アティーヤ（一八九八—一九八八年）はコプト正教会信徒としてエジプトに生まれ、カイロで教育を受けた後、ロンドン大学で博士号を取得した。イスラーム中世史を専門とし、エジプトをはじめ欧米各地の大学にて教鞭をとった。コプト学研究の推進に尽力し、『コプト百科事典』（Coptic

Encyclopedia）の編纂を主導したことで知られている。

本書は七部からなり、アレクサンドリアを中心とするコプト教会、アンティオキアを中心とするヤコブ派教会（シリア正教会）、ネストリオス派教会（東シリア教会）、アルメニア教会、南インドの聖トマス・キリスト教会、レバノンのマロン派教会、そして現代までに消滅した教会（ヌビアなど）の歴史を扱う。各部においては、それぞれの教会のヒエラルキア、儀式や式典、教会建築やその美術、教会音楽や文学について詳しい説明がなされ、なじみの薄い東方諸教会の制度や文化への理解へと我々を導く。

東方諸教会について、日本語で手軽に読める文献はさほど存在しない。本書の翻訳は誠に喜ばしく、その労をとられた村山盛忠牧師に心より感謝の気持ちを申し上げます。ここで本書がユニークである点についてさらに述べると、それは著者として翻訳者共々「中東世界に立脚した」視点（六〇二頁）を有しているということにある。訳者である村山牧師は、一九六四年から六八年の四年間、コプト福音教会の協力牧師としてエジプト

に派遣された。エジプトでの体験を記された『コプト社会に暮らす』、そしてパレスチナ問題に関する講演や著作を「存じの方が多いであろう」。

本書は東方諸教会について、分離派あるいは異端の教会という視点というよりは、「使徒継承を無上の誇りとする」彼らの教会を中東、ひいてはユーラシア大陸の歴史の中に位置づけた上で描いている。また、本書が強調するのはムスリムと共生し、イスラーム政権下にてその文化を花開かせた各教会の歴史である。

なお、表記についてであるが、現在ヤコブ派はもっぱらシリア正教会として知られ、またネストリオス派とは彼らを異端者として位置づける蔑称であるため、現在は使用を避けアッシリア東方教会あるいは東シリア教会と呼称すべきこと（原著にヤコブ派、ネストリオス派とあるため、翻訳もそれに従われたものと推察する）を申し添えておきたい。

とはいえ、このような指摘は本書の重要性を減じるものではない。むしろ、原著は東方キリスト教史研究の古典的名著であること、本書は注や参考文献表、図版が充実しており、東方諸教会について知るための格好の手引書となっていることを強調しておくべきであろう。

現在、空前のディアスポラが進展する中、中東に住むキリスト教徒は消滅の危機に瀕している。ユーラシア大陸における豊潤なキリスト教文化に触れ、また中東のキリスト教徒について理解を深めるために、是非手にとっていただきたい一冊である。（つじ・あすか 日本学術振興会特別研究員/東京大学東洋文化研究所）
（A5判・六八二頁・本体八〇〇円＋税・教文館）

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.

好評シリーズ!

現代の教会を考えるブックレット

教会って、なんだ？

——現場からの提言——

①健康な教会を築くとして——その診断と処方

②宣教でつながる——現代の課題と展望

③宣教師の心——現場の課題と展望

A5判・160頁・本体1400円

好評につき再版!

2刷

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 048-424-2067 (節税は税別)
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

■新教出版社

神父の愛と召命

僕はルハマを選んだ(仮題)

アルベルト・クテイエ著／八重樫克彦・由紀子訳
キユーバ亡命者の両親のもとフロリダで育ち、聖職を志してヒスパニック系住民への司牧に献身する神父が、愛する人と出会い、多くの軋轢を経て結婚を選び取り、なお自らの召命に忠実であろうとする歩みを回顧する。

四六判・320頁・予価2500円

逆境の恩寵

祈りに生きた家族の物語(仮題)

徳永 徹著
明治、大正、昭和にかけてベストセラーの一つとなった『逆境の恩寵』の主人公、赤貧と病苦の中で伝道に励んだ徳永規矩(とくなが・のりかね、一八六一—一九〇三)の信仰と生き様を、同書の記述を元に再現する。

B6変型判・200頁・予価1800円

■日本キリスト教団出版局

現代聖書注解 サムエル記 下

W・ブルッゲマン著／矢田洋子訳

古代イスラエルが、部族集団から中央集権国家へと急激に変容した時代。そこには、政治的社会的現実主義、ダビデという独自の人物、主なる神の現臨という三つの要因があった。これらに注意しつつ物語を解釈することから、聖書の意図する読みへと迫る。A5判・258頁・本体5000円

INFORMATION

近刊情報

この最後の者にも 福音書の語るメッセージ

四電 揚著

神の子イエスの誕生から、さまざまな奇跡のわざや人々との出会い、たとえ話、そして十字架、復活へ。初めてキリスト教に触れる人にもわかりやすく、しかし深い聖書の読みに裏打ちされた言葉を通して、福音書を貫いてあらわされる豊かな神の愛が心にしみとおる。

四六判・160頁・本体1500円

■教文館

神のみに立つて

十戒の心

大住雄一著

十戒に示された神の御心を、現代に生きる私たちはどのように受け止めればよいのか? 旧約聖書学の第一人者がキリスト教放送FEBICで語った信仰講話。

四六判・240頁・本体2500円

お詫びと訂正 本誌二〇一四年十一月号、一三頁下段一行目、「割合は九対一」は、「割合は一对九」の誤りでした。お詫びして訂正します。

(編集部)

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲毛2-2-1 様ヶ丘駅前ビル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://seikokai-publishing.jimdo.com	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.com.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kiristoku.youshoten@narae@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yokohama_cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00540-6-82826
清光書店	951-8114	新潟市営所通 一番町313	025-229-0656	共用		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		nagaya-seibun@nifty.com	00810-5-14073
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsho/	kiorden@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakabos	sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		01150-7-45120	01150-7-45120
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三宮ビル2F	078-331-7569	078-331-9833		01360-4-1958	01360-4-1958
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951		tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	01750-5-10932	01750-5-10932
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484		017304-45044	017304-45044
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		020308-1283	020308-1283
沖繩キリスト教書店	901-2131	浦添市牧港1-60-6	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

特集 教会とは何か―その過去・現在・未来

寄稿者＝古屋正仁、佐藤司郎、柳下明子、西川

晶子、伊東和子

日本基督教団と神学教育 ……小海 基

追悼 パネンベルク教授を送る ……深井智朗

新連載 聖書味読 ……望月麻生

カナダ教会通信 ……木原葉子

好評連載 高橋優子、岩田雅、洛雲海、永本哲

也、佐藤優、青野太潮、月本昭男、沢知恵

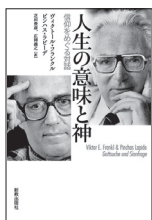
A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

人生の意味と神 信仰をめぐると話

フランクル／ラビーデ

読売新聞にて若松英輔氏書評



ナチの強制収容所を生き延びた精神科医と、ユダヤ教の立場に立つ神学者が、神とは何か、信仰とは何かをめぐり、真摯に對話した記録。 本体2400円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 9-1 TEL : 03-3260-6148 Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から

キリスト降誕祭を祝う賛美歌の定番と言えは大抵の人は「Stille Nacht, heilige Nacht」(＝「静かな夜、聖なる夜」――筆者訳)を挙げるのではないだろうか。一八一八年にオーストリアのF・X・グルーバーによって作曲されたこの歌は、その親しみやすい民謡風の旋律のゆえに世界中に広まっていた。一九八八年には西ドイツ(当時)で関連した映画「Magdalene」(邦題「マグダレーナ」)「きよしこの夜」誕生秘話)も制作された。

原詞はヨゼフ・モールによってドイツ語で書かれたもので、日本語の歌詞としては由木康訳のものが有名である。賛美歌集に初めて収録されたのは一九〇九年の『讚美歌』第二編で、一九六一年には小学校六年生の音楽の教科書にも採用され、一九八八年まで掲載されていた(川崎洋編『大人のための教科書の歌』いそつぷ社、一九九八年、二五一頁参照)。

今回、本誌(二二―二三頁)で取り上げられた、嶺重淑・波部雄一郎編『よくわかるクリスマス』(一九五頁)によると、現行の由木康による訳では「すくいのみ子は、まぶねのなかに」となっている箇所はもともとは「救いの御子は、御母の胸に」であったという。「なぜ由木康は歌詞を訳し変えたのか?」。詳しくは『よくわかるクリスマス』に譲るとして、由木康訳以外にも日本語訳があることを紹介しておきたい。

一つは日本のカトリック教会において「しずけき」という曲名で『カトリック聖歌集』一一一番に収録されているもの。もう一つ――これはある方のご教示によって知ったのだが――は一八九四年に発行された、納所辨次郎編『クリスマス讚美歌』(警醒社書店)中の「志の、め」(湯谷磋一郎訳)という曲名のものである。

それでは皆さん、メリー・クリスマス

(中川)

実践的な注解シリーズ最新刊！ 完結まで残り2巻！



現代聖書注解 全44巻

サムエル記 下

第42回
配本

W.ブルッゲマン 矢田洋子 訳

時代の背景にある政治的社会的現実主義、ダビデという独自の人物、主なる神の現臨という3つの要因に注意して聖書を読み解く。

◆A5判 上製函入・258頁・5,400円

シリーズ続刊予定 士師記／サムエル記 上

この最後の者にも 福音書の語るメッセージ 四電 揚

神の子イエスの誕生から、さまざまな奇跡のわざや人々との出会い、たとえ話、そして十字架、復活へ。新しい生き方を促す12の喜びのメッセージ。

目次より 言は肉体となった(ヨハネ1・14—18)／ひたむきな信仰(マタイ15・21—31)／土壇場の悔い改め(ルカ23・26—43)／復活の確かさ(ルカ24・36—43) ほか

◆四六判 並製・160頁・1,620円



『説教黙想』と注解書を用いて、説教作成のプロセスを共に体験しましょう

説教黙想 アレティア

説教者向け 説教セミナー開催のお知らせ

- 日時 2015年1月19日(月)13時～21日(水)15時
- 場所 日本聖公会ナザレ修女会ナザレ修道院(東京都三鷹市)
- 講師 平野克己 牧師(日本基督教団 代田教会牧師)／吉村和雄 牧師(キリスト品川教会牧師)
- 聖書箇所 ルカによる福音書24章13—35節
- 参加費 20,000円(交通費は別)

詳しくはホームページをご覧ください

虹の約束 小島誠志説教集



私たちの最も深い暗闇にまで、十字架の主は光を携えて来てくださる。著者が松山番町教会で語った創世記ヨハネ福音書、コリント書、それに教会暦による説教から精選した27編を収録。●B6判・256頁・本体1,900円

西洋古典文学と聖書

歓待と承認

ジョン・テイラー 土岐健治訳

旧新約聖書は多くの物語のパターンをギリシア・ラテン文学と共有している。本書では聖書と西洋古典文学の並行箇所と関係を明らかにし、読者を聖書の豊かな解釈へと導く。●A5判・392頁・本体5,100円

日本史におけるキリスト教宣教

黒川知文



宣教活動と人物を中心に

キリスト教伝来から現代までを、宣教の観点から概観した日本キリスト教史。各時代・各教派の宣教活動と、宣教に生涯を捧げた人物を紹介。●四六判・480頁・本体3,000円

私のヴェイア・ドロローサ

「大東亜戦争」の爪痕をアジアに訪ねて

村岡崇光 ●四六判・204頁・本体1,500円

侵略戦争の犠牲となった人々との真の和解を訴える著者が、アジア各国での思索を綴った記録。

死と向き合って生きる

キリスト教と死生学

平山正実

●四六判・208頁・本体1,500円



豊富な臨床の知と学術的研究をもとに精神科医として活躍してきた著者が、自らの信仰的実存を賭けて「生」と「死」の諸相に迫った実践的論考8編と未発表の遺稿「キリスト教と死生学」を収録。「福音を聞かずに死んだ者の救い」にまで考察の射程を広げた希望の死生学。



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop教文館

本のはろは 第六八四号 二〇一五年一月号

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇一五年一月一日発行(毎月一四日発行)
発行所 〒100-0024 東京都新宿区新小川町九一ー一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三三三六〇一六五二〇 振替〇三三三六〇一七〇一六一七九
発行人 本村利春 編集人 中川忠 印刷所 慎平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三三六〇一五六七〇

定価七八円(税抜七二円)(〒62円)
一年分一三〇〇円(送料共)